真宗大谷派　教学研究所編

蓮如上人行実

東本願寺

緒　言

親鸞聖人によって開顕された浄土真宗の教法は、蓮如上人の教化によって大衆の生活の底辺にまで滲透し、やがて仏法にもとづく生き生きとした共同体を形成するに至った。

本書はその蓮如上人の誕生から命終・還浄に至るまでの行実を、確実な史料にもとづいて、編年体の形式に順って編集したものである。その意味で本書は、昭和三十五年に当研究所が発刊した『親鸞聖人行実』の姉妹編をなすものと言うことができる。

さきに（昭和三年）、稲葉昌丸編の『蓮如上人行実』が刊行されているが、本書はその業績を継承しつつも、学会各方面の多年にわたる諸研究の成果の恩恵を受けて、上人の生涯の背景となる時代社会の動向を知ることができるように配慮し、関係史料を適宜に記載した。巻末には蓮如上人の識語と裏書とを集めた識語集と裏書集とを載せ、あわせて子弟の系図と年表を加え、また簡単な索引を附した。尚、参考までに本文には若干の脚註をほどこした。必ずしも評価が一致しないさまざまな「蓮如像」が提起されている今日、本書が機縁となって、あの動乱の世をたくましく生き抜いた仏弟子蓮如の潑剌たる姿が、現代に甦るならば、これにすぎるよろこびはない。

一九九四（平成六）年三月二十五日

真宗大谷派教学研究所

凡　例

一、本書は、蓮如上人の『御文』を中心にして、門弟の伝えた言行録、その他の史料によって、蓮如の誕生（応永二二・一四一五年）から、その歿年（明応八・一四九九年）までの事蹟を編年体で編纂したものである。

一、記載の順序は、もっとも確実な史料に拠り、年月日の順に従って配列した。年月日の明確でない事項は、内容等により推測し、適当な場所に配列した。

一、蓮如の在世期間で、蓮如と特に関係のある事件等も記載し参考とした。

一、後世の所伝であっても、根拠があると考えられるものは収載した。

一、史料の採録は、原本によるほか、写本・写真・既刊活字本等に拠った。

一、典拠となる史料の解説や、史料所蔵者・所在地などは脚注に記した。脚注部分の所蔵者等の地名は、県庁所在地の場合は県名を略し、また町村の場合は郡名を省いた。なお個人蔵については所在地名を付さなかった。

一、史料の掲載に際しては、読解の便をはかるために原体裁を改め、適宜段落を設け、句読点・並列点を施した。また文章の省略は（前略）（中略）（後略）で示した。

一、漢字・仮名の字体は、原則として今日通用のものに改め、原本の片仮名書きのものは、すべて平仮名書きに改めた。ただし送り仮名・振り仮名に関しては、片仮名を残した。

一、花押は（花押）と記し、略体の花押は（略押）とした。

一、抹消されている文字は、左傍にヽ印を付し、訂正文字のある場合は右傍にこれを記載した。

一、文字の朽損などにより判読できない箇所は□□で示した。

一、文意の理解を助けるために、編者の考証により注記を本文右傍に（　）で付した。返点の欠如の部分には（　）を付けて補った。

一、本書の企画・立案、収集史料の選別は、加納浩所員を中心にして林弘幹・十時文雄・水谷英順助手、一楽典次・柴田秀昭嘱託研究員があたり、加納退職後は、西田真因所員を中核に推進した。

一、編纂方針、ならびに原稿底本・掲載部分の決定にあたっては草野顕之大谷大学助教授より懇切な指導と助言を賜った。

一、本文・系図・識語集・年譜は十時が作成した。

一、裏書集は草野助教授の編によった。

一、脚注・索引は西田・林・十時・水谷が作成し、校正は主に林・十時・水谷があたった。

目次

諸言
凡例
蓮如上人行実……一
略系図……一七九
識語集……一八三
裏書集……一九一
年譜……二〇九
足跡略地図……二三四
索引……1
あとがき

蓮如上人行実

誕生

一四一五　応永二十二年　乙未　一歳

この年、京都東山大谷で生まれる。父は本願寺第七世存如、母は存如の母に仕えた女性と伝えられる。

拾塵記

夫、蓮如上人者、称光院御宇応永廿二年乙未誕生。童名号幸亨。鎌足内大臣より廿六代円兼長禄元六月十八日円寂六十二、存如上人法印真弟、永孝院贈内府秀光公、依早世為ル二正統家督一。日野従二位中納言兼郷卿。本名宣光改親光、又改号兼郷為子。

御文〈高田本〉

(前略)わか生所はいつくそ、京都東山粟田口青蓮院南のほとりは、わか古郷そかし(中略)

拾塵記　願得寺実悟(蓮如第二三子)筆。蓮如の行実を編年に記したもの。殊にその業績を顕彰する趣きがある。大阪府門真市願得寺旧蔵(個人蔵)。

高田本　新潟県上越市本誓寺蔵。写本。

青蓮院　天台宗。京都市東山区。当時の本願寺はその南隣にあたる。

文明七年五月廿日

一四二〇　応永二十七年　庚子　六歳

十二月二十八日、西国の出身と伝えられる生母が大谷を去る。

拾塵記

北堂は生所を不知人也。存如上人先妣の御方に常随宮仕人に侍りき。兼寿法印六歳の時、かの六歳の寿像を絵師の侍しにかゝせ取て、能似たるを表保衣等まて悉くこしらへ玉て取持て、我はこれ西国の者也、爰にあるへき身に非すとて、応永廿七年庚子十二月廿八日に常に住める所の妻戸をひらきて、供奉する人もなく只一人行方しらすうせ給ぬ。依之其日を為忌日、上人もつねに勤行せさせ給ひけり。

空善聞書

一、ある時仰に、わか御身の御母は西国の人なりときゝ及候ほとに、空善をたのみはりまてなりともくたりたきなり。わか母は我身六の年にすてゝ行き

空善聞書　『第八祖御物語空善聞書』。蓮如の延徳元年（一四八九）八月隠居から、往生、中陰までの行実を、側近の門弟法専坊空善が一七一箇条にわたって記したもの。大谷大学蔵。写本。

四条の道場　時宗。現在、京都市北区。金蓮寺の通称。

かたしらさりしに、年はるか後に備後にあるよし、四条の道場よりきこえぬ。これによりてはりまへくたりたきといひけれは、空善はしりまはり造作し候よし候。命あらはひとたひたりたきなりと仰候き。

生母は石山寺の如意輪観音の化身という伝承。

拾塵記

或人、石山寺に参たりしに、此上人六歳の寿像、かの如意輪観音の仏檀かけられをかれしを人皆これを見、されは彼母儀御前はたゝちに石山の観音たりと云事、不可疑事也。

継母如円尼との確執。

拾塵記

その後、継母御方座して、応玄阿闍梨為青蓮院円光院准后尊応資、法名蓮照遁世号学本坊大弐蓮康等、母儀也。

石山寺　真言宗。大津市。平安時代から観音霊場として庶民の信仰を集める。蓮如の生母を石山観音の化身とする説が、蓮如歿後まもなく出ている。

一、蓮如上人は、御若年の比は御継母の如円禅尼と申おはしけり。蓮如上人卅(マヽ)三歳の時、円兼法印存如上人宣(還)化し給ける。然は御若年の比、御母儀の一段なさけなくあたりまいらせられけるとそ伝うけたまはる。実子の円光院応玄を御執事御寵愛にて、是を御住持にと連々内証に思食たりし間、万事蓮如上人の御方をはひつめ(歪)まいらせられける。

天正三年記

一、蓮如上人は、御若年の折は御方様と申候、御継母の儀によりて、殊外に御迷惑の御事にて侍し。

『天正二年記』ともいう。蓮如の言行を記したもの。天正二年（一五七四）成立。全二〇七箇条。願得寺蔵。

天正三年記　実悟筆。「蓮如上人御若年砌事」「順如上人願成就院殿事並応仁乱」「加賀一乱並安芸法眼事」の三部からなる。「蓮如上人御若年砌事」は光応寺蓮淳が慶聞坊竜玄に尋ねて書いたものを、実悟が天正三年に書写したのでこの名がある。大谷大学蔵。写本。

修学

一四二九　永享元年　己酉　十五歳

この年、真宗再興の志を立てる。

天正三年記

一、蓮如上人は、十五歳より是非ともに開山聖人の御法流の儀、可レ被二仰立一

と思食たゝれ、既に御存分の如く六十余州に御門流ひろまりたる事を御満足の由、蓮如上人御自語ありての御ことはに、今各々心易く仏法を聴聞する事も、此法師かわさよと(業・技)被レ仰事にて候。我一人冥加にかなふに依て皆々安隠(穏)に在そと被レ仰、如何程の御苦労ありてか、加様に一宗繁昌し兄弟中、心易在事そよ、末々の弟共にも此の趣能々可二申聞一事肝要也。少も冥加を忘れては忽(忽)に可レ蒙(ル)二御罰(ヲ)一事也。

一四三〇　永享二年　庚戌　十六歳

この年、『教行信証』の伝授を受ける。

蓮如上人仰条々

一、同其比は大谷殿にては御方と申也（中略）教行信証は十六歳御時六日に被請取侍とそ承る。

聖教の研鑽。

天正三年記